

<研究会記録>1. 当科における顎関節症の臨床統計的検討(東日本学園大学歯学部研修会 : 第6回東日本学園大学歯学部口腔外科研究会)

著者名(日)	平 博彦
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	8
号	1
ページ	78
発行年	1989-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007427/

一般講演

1. 当科における顎関節症の臨床統計的検討

平 博彦（口腔外科II）

顎関節症は、顎関節部あるいはその付近の疼痛、顎関節雑音、下顎運動障害を主症状とする炎症症状のない慢性疾患である。

今回我々は、昭和54年12月より昭和64年12月までの9年1か月の間に東日本学園大学歯学部附属病院口腔外科において、顎関節症と診断した症例に対し、臨床統計的観察を行い、その概要を報告した。

結果：対象症例は86例で、そのうち女性は57例、男性は29例とほぼ2：1の割合で女性に多かった。

年齢は14歳から69歳にわたり、平均年齢は36.3歳であった。年代別にみると、20歳代が30例と多い傾向を示した。

罹患側は、右側37例、左側27例、両側12例と右側に多く認めた。

主訴は疼痛57例、開口障害13例、雑音9例、違和感5例、疼痛と雑音が2例であった。

症状発現から来院までの期間は、最短で1日、最長で約20年で、1か月以内が17例と最多を示したが、期間は

まちまちであった。

来院経路は、直接来院が59例、紹介来院が27例（歯科16例、内科11例）であった。

原因は多くの症例で不明だが、不適合義歯、硬固物咀嚼、偏咀嚼、ブリッジ脱落、長時間開口、矯正などが考えられた。

当科での処置を

1. 薬物療法（筋弛緩薬、消炎鎮痛剤など）
2. 理学療法（マイオモニター、赤外線照射など）
3. 歯科的療法（咬合調整、バイトプレート、抜歯など）
4. その他

に分類した。単独療法が42例、併用療法が26例、処置を行わなかったものや不明が18例であった。単独療法で最多は3の34例、併用療法で最多は1+3で14例であった。

治療効果は、処置を行った68例のうち、有効30例、やや有効20例、不変6例、不明12例で、増悪はなかった。

2. Quadrilateral analysis の外科的矯正治療への応用

江上公子，森田修一，石井英司
（矯正）

下顎前突症例に対し外科的矯正により、よりよい術後の顔貌および、咬合の改善を得るためには、術前矯正により上下前歯歯軸の改善が必要であると考えられている。しかし初診時に各症例に応じた術前矯正終了時の望ましい上下前歯の位置を決定するのは困難である。そこで今回我々は下顎前突症例の術前矯正に用いる上下前歯の位置の普遍的な指標を求めべく以下の検討を行った。

方 法

1. 次の各項目についてセファロの一般的計測およびquadrilateral analysis の特に歯の位置について検討した。

(1)外科矯正後咬合が安定している女子10名と非治療正

常咬合者との比較

- (2)外科矯正を行った女子10名の初診、術前矯正終了時、術後矯正終了後咬合が安定した時点の比較

2. 1. により得られた術前矯正の目標が実際の一つの症例にあてはまるかどうか検討した。

結 果

1. 外科矯正患者では、下顎が前方位で上顎前歯の唇側傾斜が認められたが、A'B'line に対して、上下前歯切縁の前後的位置は正常咬合者群とほとんど一致し、上顎前歯で約11mm、下顎前歯で約8mmであった。
2. 術前矯正治療においては、上顎前歯の舌側傾斜と、下顎前歯の唇側傾斜がおきている。また術前矯正終了時と術後の重ね合わせより下顎骨は平均8mm後退